第11回沖縄科学技術大学院大学学園の今後の在り方に関する検討会
議事要旨

１．日時：令和８年10月13日（火）10:00～12:00
２．場所：中央合同庁舎８号館５階共用Ｃ会議室
３．出席者
（１）構成員
益座長、塩見座長代理、大栗委員、栗井委員、高橋委員、塚本委員
（２）内閣府
矢作沖縄振興局長、工藤審議官、大森総務課長、森下室長
４．議事要旨

議事１　検討会報告（案）について
資料1-1を用いて事務局から検討会報告（案）について説明した後、質疑応答及び意見交換を行った。本議事は忌憚ない意見交換等を行う趣旨から非公開で実施した。主な内容は以下のとおり。
○＝構成員、●＝内閣府

○　OISTを取り巻く今後の外部環境の変化を考えたときに、最も重要なのは何かということをどのぐらい明確に示すべきなのかという観点から、「期待される」、「望まれる」、「重要である」等の文言の使い分けの考え方を教えていただきたい。
●　まず積極的に評価しているという区分では「高く評価できる」と「評価できる」は書き分けており、「高く評価できる」の場合は、ここ５年間の外部資金の伸びや、県内のスタートアップの約25％をOIST発で占めていること等が該当しているが、そこまでに至らないが評価できるところは「評価できる」として書き分けている。「課題である」や「必要である」とか、そのような語尾のところは、少し強めに書いて、OISTに対してしっかりと取り組んでほしいという強いメッセージを出している。「望まれる」や「期待される」といった文言は、程度として課題よりももう一段軽めの意味合いで書いている。特に「課題である」や「必要である」の部分は、しっかりと毎年度の事業計画に反映されているかどうかしっかりと見ていかなくてはならないと考えている。
○　３ページ目以降の（２）「外部環境の変化」として、第７期科学技術・イノベーション基本計画策定時の議論として、国の多くの大学群の中で、多様な大学群を持っていることこそが日本全体の強みになるという前提があったところ、OISTのユニークな存在自体が日本全体の大学群の中で価値があることが明確にされておらず、４ページの２行目の「科学とビジネスの近接化」の前に、１段落入れた方が良い。
○　今のような趣旨を「はじめに」の最終段に「また、OISTがこれまで構築してきた研究・

教育モデルとその成果は、OIST自身の評価にとどまらず、我が国の将来の研究力強化、イノベーション創出の在り方を考える上で重要な知見を提示しており、我が国の科学技術・イノベーション政策に対しても大きな示唆を与える」というような表現で入れてはどうか。
○　研究者の卓越性や研究者に高い裁量が与えられていること等のシステムについて、研究者、研究内容や論文の成果については「評価できる」と書いてあり、オープンセンター構想については「高く評価する」と書いてあるが、将来に向けたオープンセンター構想をサポートするような表現にしたいと解釈して良いか。また、文末の言葉として「望まれる」とあるが、本当はこれを望むだけではなく、国からの支援等によるサポートが必要となるが、このことも含めて「望まれる」と書いてあるという理解で良いか。
●　オープンセンター構想は、来年度６億円要求している。ザイフマン学長が「OIST５×５戦略」を６月の検討会で打ち出し、これを踏まえ内閣府としても支援していくことにしたので、将来的にオープンセンターをサポートしたいという趣旨も込めて「高く評価する」と書いたところである。ハイトラストファンディングを基盤として、そこを超えていくような日本の戦略的な話も意識しているという意味でも予算面でサポートしていきたい。このため、続く表現でも、日本のサイエンスがどのようにブーストされるかを意識して取組を進めてほしいということで「望まれる」という結び方としている。
○　ザイフマン学長の説明を聞いて、これは非常にビジョンがある良い構想だと思ったので、それをもって「高く評価する」という文言で良いと思う。
○　ハイトラストファンディングを超えた世界水準の研究成果の創出のためには、こういった仕組みが必要だというところは分かるが、「超えていく」という表現は、ハイトラストファンディングが踏み台にされているような感じがしており引っかかる。
●　事務局としての認識は、ハイトラストファンディングという良いものがもともとOISTにあって、そこに上乗せされていくものとして、オープンセンターという学内の競争的資金的な枠組みが追加的にあるイメージと理解している。
●　オープンセンター自体は、それぞれのユニットをまたいでいくので、そういう意味では「基盤の上に設置された」と言う方が現実には即しており、文言は調整したい。
○　学長の任期途中の交代の取り上げ方について確認したい。様々な媒体で記事となっていたが、内閣府の受け止め方を教えてほしい。
●　学長の交代については、戦略的再配置ということで、学長が任期途中で交代したことを検討会としても受け止めた上で、OIST理事会のヴィジェイ議長や研究者から聴取した内容を踏まえながら報告書案をまとめている。検討会の議事要旨にも、ヴィジェイ議長に対して、学長の交代についてヒアリングしたという事実を公表している。その他、研究者や学生にもヒアリングを行ったが、こういう意見があったという内容も公表している。
○　「科学の島」という表現は良いと思うが、沖縄は「科学の島」であるというイメージがどの程度一般的に知られているのか。どのような「科学の島」なのかということについて、答えられるようにしておくことが必要だと思う。「科学の島」という言葉は、沖縄県

民にとって比較的なじみのある表現ということで良いか。
● 公的な文書でこれまで使われてきた用語ではないと承知しているが、昨年12月の検討会で沖縄振興を議題とした際に、沖縄が「科学の島」になることも一つなのではないかという議論があった。それを踏まえ、アウトリーチ活動等で、県内外問わず多くの方々がOISTを訪れているが、間接的に「科学の島」というようなブランディングができていくことも沖縄振興の一つであり、そういう将来に向けてのメッセージという趣旨で言及した。
○ 10ページの「科学の島」という表現は良いが、OISTを設立した経緯を先に書いて、それから将来への願望として「科学の島」になるというイメージも積極的に発信していくことが分かる表現とした方が良いと思う。
○ 知っている人は感じていると思うが、「科学の島」になっていくことをメッセージで伝えるのが良いかと思う。
○ ６ページの20行目に「（教授会を）少なくとも年に３回開催」とあるが、今まで100PIだから、全構成員を集めた形であっても、ふだんから風通しが良いので年に３回の開催で良かったのか、100PIを超えていくに当たり、３回では足りないということを言っているのか。どういうつもりで「少なくとも年に３回開催されている」と言及したのか確認したい。
● 検討会の教育・研究の議題に係るOISTによる説明の中で、教授会の記述があり、年に少なくとも３回開催されているという部分を捉えて事実関係として書いたところである。
○ カルテックは約300PIであるが、大学全体の教授会と部門毎の教授会の２種類がある。部門毎の教授会は大体月１回開催しているが、大学全体の教授会は年３回である。OISTも、これから200PIぐらいまで増えていくと、会議が大き過ぎるという印象となり、全学の教授会は３回ぐらいが限度ではないかと思う。
○ 「科学の島」について、最近沖縄経済界が産総研の量子関係の施設を見学に来ており、沖縄振興、科学の振興を急速に進めようとしている。こういうところでも「科学の島」を書くことはよりプラスになるかと思う。
○ PIの採用や学外審査、施設設備、研究人材への支援、日本語クラスや生活支援、オープンセンター等は言及されているが、研究自体の成果としては、トップジャーナルに発表した論文数が高いことや、Top10％・Top１％論文比率が国内では高いという、ジャーナルのランクと相対被引用度しか言及されていないのが引っかかる。ノーベル賞が出たというのも言及されているが、もう少し何か足せないものか。前回の検討会で国際外部ピアレビューの説明があったが、そこから引用することも考えられる。
● 出典を明記する必要があるが、国際外部ピアレビューの報告書は、既にウェブサイトでも公表されているので引用できる。
○ 一段落でもそういったことを入れた方が良いと思う。一方、先程言及した研究人材への支援といった内容について、「研究の成果等」に書いてあるがこの位置で良いのか。
● 10ページ目の「教育研究」の確認事項の１点目は研究成果を創出しているかどうかの観点であるが、その前提として、どのような人材獲得、トップレベルの科学者を集めるた

めにどういう支援策をやっているかを評価項目のどこに記述するかというと、研究成果そのものではないが、置き場所としては一番適当かと思う。
○　付随するものとしてあっても良いと思うが、本来の研究成果を一段落でも入れるのが良いかと思う。もし可能であれば、国際外部ピアレビューに出ている内容を引用し、エッセンスを取り出して文章にするのはどうか。
○　国際外部ピアレビューのメンバーである国際的に高い評価を持つ研究者において、100PIの割には研究分野が広く、横断的であるということは認めており、そういう研究環境が実現できていると評価されていることは書けると思う。
○　今こういう研究分野に強みがあるという文言は一言もないので、そういう内容を表してみるのは良いかもしれない。
○　今後、「教員100人を超える規模拡充が必要」であると書いてあって、その根拠等を４項目書いているが、「100名を超える」という書き方だけで終わって良いのか。OIST側の期待としては、次の段階として200PIぐらいまで持って行きたいと言っている。
　一方で、PIを増やすことで、現在の１人当たりの手厚い支援が薄まってはいけない。OISTの持ち味として、PI１人当たりの支援が手厚いことが非常に重要だということがあり、もう一方では、100PIでは異分野間の交流等様々な不具合があるのは、どなたも認めることなのだと思っている。報告案では、少し保守的というか「教員100人を超える規模拡充が必要である」にとどめているので、これで良いのか確認したい。
●　「教員100人を超える規模拡充」を24ページで書いた上で、29ページ目の「結語」の24～25行目で「教員200人を目指す」と200PIについて言及している。前回の検討会での議論を踏まえて「200」を「結語」として書き込んでいる。
○　「結語」は、それまでのことを全部サマリーとしてまとめたものなので、ここだけに書くということで良いのか。つまり、なぜ100PIを超えるところにこだわるかというと、100PIを超えた方が良い理由について４つ論点を挙げて説明している訳であるが、「結語」になって、突然「200」が出てくるのは唐突な印象ではないか。
●　しっかりとマネジメントすることを前提に、定期的にチェックをしながら200PIを目指すという姿勢について、検討会として賛意を示すということを「結語」だけではなく、他の部分にも書くことは構成としてあり得る。
○　「結語」のみならず、本体の方にも言及があって良いと思う。設立10年目にあった評価でも、OIST自身が200PIを目指すことについて言及していた。これを受けて、今、私たちが100PI以上だったら良いみたいな、OISTが目指すことをへし折ることをしなくても良いと思う。そういう目標を持って、今後もやってねというエールを与えるために、そういう数字を「結語」だけではなくて、具体的に言うと24ページの規模拡充の部分等に入れておいた方が良いと思う。
○　それについては基本的に賛成で、急速に変化する国際研究環境の下では、現状維持は競争力の維持を意味しない、現状維持では駄目だということをどこかで言っておかないと

いけない。「結語」だけでなく、他の部分にも入れておいた方が良いと思う。また、「結語」に、卓越性を維持・発展させるためには、継続的な成長と機能強化が必要であり、OISTが示す将来ビジョンは、その観点から十分な合理性を有するということも入れてはどうか。また、規模の拡大そのものを目的化するのではなく、OISTが培ってきた卓越性、学術性、国際性及び機動性を維持しながら持続的成長を実現していくことが重要である、ということも「結語」等に入れると良いのではないか。

○　検討会として賛意を示す以上、OISTが200PIと考えているとしっかりと書かなければ賛意の示しようがない。

●　規模の拡充について、OISTがこういう計画を取りたいと６月の検討会にて示したことを現状の部分でどこかに書くことは可能だと思う。その上で、OISTが示している200PIに対して漸進的かつ計画性を持った形での規模拡充ということで、５年ごとのレビューによる成果等の確認が必要となる、そういう枠組みの中でOISTが200PIを目指すという形であれば、「結語」に書いてあることをⅢ章（１）の規模拡充のところでも書くことができるのではないか。

●　（１）は、規模の拡充の話のみを書いていて、「結語」は、これらを全部受けた形で書いているので、200PIを目指すことに賛意を示すことを（１）にどう書くかは、多分、（２）「OISTの強みの確保及び発展」、（３）「沖縄及び我が国経済社会の発展への寄与」、（４）「規模の変化や組織の特性を踏まえたガバナンス・マネジメント体制の見直し」等で言及していることを全部行うということが前提ということである。Ⅲ章の１の（１）に書くのであれば、Ⅲ章の１の「今後のOISTの機能強化方策」や２の「財政支援の在り方等」に示された取組を行うということを踏まえて、この方向性に賛意を示すという書き方を考える必要があるのではないか。

○　OISTが、報告書に掲げられている他のことは取り組まないけれども、研究だけを行うためにPIを増やすことを認めてくれたと解釈されてしまわないようにする必要がある。

○　１点目に、現状維持では駄目ということに関して、23ページの総括評価の「今後も」の前後にでも、現状維持は駄目で変わり続けることこそ重要であるということは入れた方が良い。

２点目に、報告書案全体を通じる話であるが、財源多様化の構成要素としてのライセンス収入の取扱いである。財源多様化の一項目として、ライセンス収入の増加はありだと思うが、OISTのポテンシャルを考えると、スタートアップの方がより現実的ということをどの程度書くかである。現在狭義の特許のライセンス収入が財源多様化に寄与するというロジックになっているが、もう一段階上位概念の研究成果の技術移転や社会実装といった、第７期科学技術・イノベーション基本計画でよく使われているより広い意味の言葉に統一しておいた方が、知財収入を上げる必要があるというバイアスがかからなくて良いのではないか。スタートアップの方がOISTには適しているという理由もある。

３点目は、国内アカデミアとのコラボレーションや交流についてであるが、全体的な印

象として、日本国内のアカデミアコミュニティとの交流が少ない。少額の科研費であればOIST内で完結するが、科研費の特別推進研究やERATO等へのOISTの存在感がほぼないことの一つの要因として、そのこと自体は問題ではないが、OISTはもともととても海外に開かれているので、著名な国内学会等にほぼ行っていないとか、日本語の論文発表が少ないという理由はあると思う。今後、財源の多様化や国内共同研究を推進すること、また、第７期科学技術・イノベーション基本計画の議論における多様な研究大学群のロジックとも関連するが、国内研究大学群の中での多様性への貢献を通じたプレゼンス向上を思うと、国内のアカデミアの研究者とのコラボレーションについてもう少し書いても良いと思う。

○　それはとても重要なことだと思う。今後は違うと思うが、元々国からのサポートの割合が大きかったので、科研費の学術変革領域研究（Ａ）、特別推進研究やERATO等の研究グループに入らなくても十分に研究ができたという過去があると思う。そうなると、国内のコミュニティに入っていないということが実際あるかと思う。

○　ERATOは研究主幹（PD：プログラムディレクター）が３分野ぐらいを決めて、その人たちが国内の研究者を候補者としてピックアップして、ヒアリングして、最初は10人ぐらいに絞って、それを最終的に３人に絞り採択する。ボトムアップ的ではなくて、むしろトップダウン的だけれども、OISTの研究者が候補者に上がったのを一回も聞いたことがない。CRESTやさきがけも同様にPDが分野を設定して公募しているが、採択されているのを見たことがない。OISTが国外を向いているからなのか。

○　国内研究大学群の中でのプレゼンスという意味だと、国内コミュニティに入っていないことは影響が大きいのではないか。

○　ホライズン・ヨーロッパ（EUが実施する研究助成プログラム）に入って、OISTの研究者が海外を向いて研究資金を取りに行っていればそれで良いと思うがそうでもない。財源の多様化は、OISTの実力をもってすれば、取りやすい競争的資金はたくさんある。

○　例えば25ページの（２）の「OISTの強みの確保及び発展」の部分に、国内のコミュニティにおける貢献について入れても良いと思う。

○　単に貢献と入れると、サービス的な意味になってしまうので、貢献だけではなく、財源確保にもつながるということを言う必要がある。

○　科研費の申請の場合、外国人研究者から見ると、英語の審査等の問題もあるが、AIの活用が進んだので、英語で書かれていても審査員は評価できると思う。

○　国内の研究所の長に就任していた時期があるが､過半数が外国人の研究所だったので、国内の研究者との交流でいろいろと言われたりしたことはあるが、少なくとも科研費については、年によっては採択率が日本人の研究者を上回ったこともあった。

理由として、研究所の中に、科研費等競争的資金の申請をサポートする職員がおり、外国人研究者向けの科研費応募ワークショップを行っていた。それが結構効いたところがあるので、OISTにおいても既に取り組んでいるかもしれないが、行っていなければこれから取り組まれるのもあり得る。

国内の研究者との事実的な交流は、言葉の問題や地理的な問題もあるが、OISTにはいろいろと努力してもらうしかないと思う。

○　科研費については、最近、国内の様々な大学でも外国人研究者が増えて、外国人に頑張って科研費を取ってもらわないと立ち行かない。先程発言されたような外国人向けの講習会も増えているはずなので、実施している大学と協力して取り組まれると、お互いにとってプラスになるのではないか。国内の他大学で、外国人のために一生懸命にやろうとしている取組をOISTの教職員と一緒にやると、OISTにとってもプラスであり、また相手方の大学もOISTの研究者の発想や、外国人に対して何をしなければいけないのかがより分かって、お互いにプラスとなるということを書き込めないか。

●　先程発言のあった国内のコミュニティにおける貢献も含めて検討させていただきたい。

○　23ページの33行目に『日本の「サイエンスゲートウェイ」』とあり、10ページでは「科学の島」と使っているが、あまり様々な表現を使わないようにして、沖縄振興に関わる関係者全てが同じ言葉を使うようにした方が良いと思う。「サイエンスゲートウェイ沖縄」と言われたらOISTを思い出すようにするために、何か言い回しを選んで、繰り返し使って浸透させる手法を取ると、広報・ブランディング的には良いと思う。

また、13ページの５行目の「研究の成果等」のところに「募集枠に対する倍率が極めて高い上、充足率も一定の水準を維持しており」とあるが、調整中として机上配付された指標一覧を検討会報告と一緒に出すとすると、募集枠に対する充足率が、2015年度は157％だったのが、2025年度は38％となっている。この数字だけを見ると「充足率も一定の水準を維持」と言って良いのか。

●　2015年度と2025年度で充足率にかなり差があるが、OISTに確認したところ、卓越した人材から多く応募があったときは募集枠を超えてでも採用し、そうでないときは無理に募集枠を満たさないという説明があった。また、2020年度が「－」になっているのは、コロナ禍で公募をかけずに採用したためである。年度によって充足率は変わってくるが、過去の検討会のやりとり等も踏まえた上で､充足率が高いとまでは言えないところで｢一定の」という表現とした。

○　先程発言のあったライセンス収入、研究成果の技術移転や、社会実装に係る収入について、OISTに無理をかけて、近視眼的な方向に走らないかどうか心配だったので、「長期的」にと修正を提案し反映されている。

○　構成員から提案のあった「結語」の修正意見の中で、「継続的な成長と機能強化が必要」とあるが、強化のみならず不断のブラッシュアップみたいなイメージも入っているのか。また、「結語」の部分で「卓越性、学際性、国際性及び機動性を維持しながら」との修正コメントについても、その後に変革すべきところは変革し、のようなことを入れておいた方が、持続的成長に結びつくように思う。また、場合によっては取組自体をスクラップすることもあり得るのではないか。

○　25ページ（２）「OISTの強みの確保」に係る27行目の文言で、「（OISTの）特色ある

モデルは、我が国の大学・研究機関において必ずしも一般的ではなく」とあるが、「必ずしも一般的ではなく」ではなく、もっとポジティブな表現にした方が良いと思う。
○　報告書の文言ではないが、机上配付された指標一覧の「教育・研究」の「研究の成果」で、PI公募時の競争率が、2015年度段階では122倍であったが、2025年度には64倍と倍率が下がっている。それなりの数の母集団の中からこそ、良いPIが選べるということを踏まえると、この数字はかなり気になった。
○　倍率だけでなくて、公募数にもより、何ポスト公募したかにもよる。
○　大学院大学なのに、学生のことが書かれていない。結語にある「我が国において特色ある研究運営モデルを構築し」の部分に、大学院大学としてのモデルを入れても良いか。また、「世界中から優秀な研究者を惹きつけ、（小規模ながら）質の高い研究成果を創出する」という表現自体は良いが、「大学院生」とか「学生」という言葉が出てこないので、用語として入るような文章にした方が良い。
　もう一つ気になったこととして、「博士号の取得者数の累積」は256人となっているが、開学後最初の５年間は修了者が出ないとしても、その後の10年間の修了者数が年間平均25人と考えると、学生の在籍者数と比較して実はあまり多くないのではないか。博士号の取得率はどうなっているのか。
●　入学期毎の修了者数に係るデータはある。１期生から10期生まで順に29名、17名、23名、21名、31名、29名、23名、37名、10名、１名となっている。11期生以降は在学中で修了生はいない。
○　入った学生のうち、何名が学位を取得し、何名が退学しているとか、何年かかって修了しているかといったデータはあるのか。いずれOISTでも、５年後、10年後にはこれらに対する評価が出てくるはずだと思うが、米国の大学では学生の卒業率や何年で卒業しているかというデータを見たことがあるものの、日本の大学では、学部も大学院もあまりこのデータを公表していない。

　質疑応答及び意見交換の最後に益座長より以下のような発言があり、異議なく了承された。

○　事務局においては、本日の意見交換時の構成員の意見、コメントを踏まえて、私も含め必要に応じて構成員の皆様方とも調整しながら、次回の検討会に向けて、検討会報告(案)の修正作業をお願いしたい。検討会報告書（案）に関する構成員間での議論・検討は、今回の検討会で終了とし、次回検討会を最終回として検討会報告（案）の取りまとめを行うこととさせていただきたい。